

7. やはり「和邇氏(族)」は押さえておかなければならない?!『古事記』はこちら?!

(1)「初期大和王権?」は、「和邇氏(族)」が中心であった?!その中に、「多氏(神八井耳)」勢力がいた?!

前号(6)では、北部九州、とりわけ有明海沿岸部(筑紫国?)の氏族・勢力についてみてきた!すなわち、そこにおける「三沼君氏」の存在(活躍?)に注目したが、しかし、そこでは、多分?その一郭(南東部?)にあったであろう「邪馬台国」と、その後の「筑紫(筑後)」の関係までは、ほとんど言及できなかった?!前号で紹介した宮島正人氏は、その「邪馬台国」の後裔氏族が「筑紫君氏」で、その「筑紫君氏」が、「三沼君氏」であったというような前提?であったようにも思われるが、ひょっとしたら、「三沼君氏」は「伽耶系」(崇神)のモデル?)で、それが、「百済系」(「沸流系余氏」)の「藤(籐?)大臣」に取って代われ、彼らが、新たな「筑紫君(氏)」となった(→「倭の五王」)?!実は、私は、そのように捉えているのである?!

そこで、その「筑紫君(氏)」の変遷の中で(それ以前に?)、おそらく(確かか?)、いわゆる「倭国大乱」と呼ばれる、西日本全体の動乱(2世紀末)の中で、東(近畿)から西に動いた氏族・勢力がいたわけであるが、私は、その氏族・勢力こそが、「多氏」(神八井耳)勢力(の一派?)と捉えているわけである?!そして、その「多氏」勢力は、ここで言う「和邇氏(族)」の仲間(一部?)であるが(この和邇氏(族)全体が、いわゆる「前方後方墳勢力」、そして「手焙型土器(火)勢力」である?!)、彼らは、近畿(多分?近江)で袂を分かったのではないかと考えているのである(そのことが、神武の(大和での)子、すなわち「神八井耳」と「神沼河耳(第2代綏靖)」の関係話となっている?!)?!

ということで、この「ワニ/和邇(和爾・和珥・丸邇・鰐等)」という奇妙な名前をもつ「古代氏族」が、「多氏」を初めとして、その存在と活躍が大きかったであろうことは、ある意味よく分かるのであるが、何故か、彼ら(多氏を含めて!)は、「記紀」(特に『日本書紀』?)においては、歴史の表舞台から遠ざけられているように思われる?!ここでも、『日本書紀』編纂者達が、何かを隠している?そういうことであるが、だから、その後裔の「多氏(安万呂→人長)」が、『古事記』によって、婉曲ではあるが、その隠された部分を示そうとしている?!今の私には、そのように思えるのもある(まさに『古事記』は、そうした性格を有するものでもある?)?!

その際、これもまた、ある意味飛んでもない?推測(空想?)となるが、上記の「倭国大乱」の時に、近畿から西に動いた(文物の移動を伴って!)氏族・勢力、それが、後の「多氏」の先祖である「神八井耳」の勢力であり、その彼は、例の神武の、大和での長子であったが、何故か、次子の「神沼河耳(第2代綏靖天皇)」に政権を任せ(敗北した?)、大和(政権)を去った?!そして、その一部の勢力が九州に来て、九州山地沿いを手中に収め、「火(肥)の君」(「阿蘇の君」も!)、「大分の君」等が、九州(とりわけ中南部九州)に勢を張ることになった(多分?このことが、おそらく、かの「景行天皇」の九州遠征・熊襲征討の話の基となっている?ちなみに、宮崎/日向の「諸県君」牛諸井は、その「景行天皇」の子とされている?!)?!

要は、(九州での)倭国大乱?において、「奴国」を中心とする「倭国連合」を解体させ(中核の、安曇族の「奴国」を追いやり、一方で、力をつけていた、隣の「伊都国」を、「一大卒」の駐在によって睨みを利かし?)、新たな「邪馬台国連合」を出現させたのは、吉備(→出雲経由?)から出て、近畿(近江)で集結した「ワニ族→前方後方墳勢力」であり、「火の勢力」(「手焙型土器」→鬼道?→卑弥呼?)であったのではないかとということである?!だから、かの強大な「奴国」や「伊都国」も、その傘下に収めることが出来た?!まさに、「邪馬台国連合」とは、そういうものであったということである?!

(2)改めて、「和邇氏(族)」とは、いかなる氏族・勢力であったのか?!「前方後方墳勢力」の中心?!

そこで、改めて、その「和邇氏(族)」であるが、彼らは、第5代「孝昭天皇」の長男「天足彦国押人命」(『古事記』では「天押帯日子命」)の流れを汲み(→皇別氏族)、直系の「和邇臣氏」の遠祖は「彦国葺ひこくにぶく(4代目?)とされ、本拠地は、奈良盆地東部「春日、大和国添上郡和邇(天理市和爾町)」とされている。他にその関連地としては、全国に多数あるらしいが、滋賀県滋賀郡志賀町和邇春日が、代表的であるとされる?!朝廷では、埴輪などの祭祀土器製作集団を率いて、山稜の管理、古墳埋葬者の事績の語り部的な役割を持っていたらしい?!元々は、「春日」氏と呼ばれ、その後「和邇」姓となり、第29代「欽明天皇」の頃から、また「春日」姓に改姓されたとも言われている?!

ちなみに、その後、この一族から多くの枝族が発生した。有名なのは、柿本人麿の「柿本氏」、小野妹子、小野小町、小野道風で有名な「小野氏」(こちらは確か?出雲の「日御碕神社」の社家でもある!)、山上憶良の「山上氏」、粟田真人の「粟田氏」、そして、石上神社社家の「布留氏」等、歴史上活躍する氏族・人材を輩出している!特に「小野氏」は、鎌倉時代以降、武蔵七党の「横山党」「猪俣党」という武士集団として活躍し、その流れから、江戸時代には、大名家及び武士として残り、現在まで繋がっているとされている。

さらに、例の「息長氏」とは、非常に近い関係にあったとされ、天皇家は少なくとも、第15代「応神天皇」以降は、「和邇腹」と「息長腹」を、特に、血脈維持の上で大切にされた節があるという評価もある?!なお、その2氏の頂点に立つ人物が、「天日矛」や「神功皇后」、さらには「継体天皇」と関係のある「彦坐王」で

あるとされ、この謎に包まれた人物こそ、「記紀」編纂者、すなわち「藤原政権」が、その真実の姿を隠そうとした形跡大と言われているのである?!このことは、まさに、私の方でも追求している「我が国古代史の闇?」の部分でもあるが、そこに、「和邇氏(族)」との関係も絡まっているのである?!

しかるに、この「和邇氏(族)」は、それ程政治上では活躍していないように思われているが(「葛城氏」「物部氏」「大伴氏」などとは比較しようがないともされる?!)、その「和邇氏(族)」の一人?「難波根子建振熊」だけは、その活躍が、「記紀」には示されている!そして、第10代「崇神天皇」から第25代「武烈天皇」までの血脈に、最も深く母方として関係しているとされるが、その実体はいかなるものであったのか?

さらに、第30代「敏達天皇」までに、9ないし10名の女性が、「記紀」に、妃として記録されているというが、これらの妃の子が天皇になった事績は、「崇神天皇」以降は全くないということでもある?!これだけ多くの女性を妃として天皇家に出した氏族は、後の「藤原氏」を除けば存在しない?!それは、果たして偶然なのか(第15代「応神天皇」以降、「敏達天皇」までが最盛期のような?)?!

参考までに、関連神社としては、「和爾下神社」(天理市櫛本町、大和郡山市横田町)、「神田神社」(大津市真野町)、「小野神社」(滋賀県志賀町小野)、「柿本神社」(奈良県新庄町柿本)、「浅間^{あさま}神社」(山梨県一宮町)、「富士山本宮浅間^{せんげん}大社」(富士宮市宮町)等が有名である。その中で、富士宮市の「浅間神社」(「和邇部氏」が社家!)の「和邇氏系図」は、最古のものを伝えているという?!ただし、その富士宮市にある、駿河一宮「浅間大社」は、創建が、山梨県の甲斐一宮である「浅間神社」よりも、少しだけ新しい?!さらに、富士吉田市にある「富士浅間神社」(「大伴氏」社家)は、別系統の浅間神社でもあるらしい?!(以上、ウィキペディアより)

(3)「記紀」から見た「和邇氏(族)」の立場・役割?!

ところで、以前に紹介した、藤井耕一郎氏の『タケミカヅチの正体オミ氏族対ムラジ氏族』(河出書房新社、2017年)によれば、「前方後方墳勢力」(手焙形土器勢力→火(日?)の勢力)によって駆逐された「環濠集落勢力?」のシンボルである「巴形銅器」が、弥生後期に出現し、弥生終末期には消滅したのであるが、古墳時代の前期後半(4世紀頃)に形を変えて復活するというのであった(しかも、「半島南部」と「大和」で!ただし、「大和」が中心であった!)?!

改めて、一体これが、何を意味するか?であるが、素直に解釈すれば、その古墳時代の前期後半(4世紀頃)に「大和」を支配したのは、弥生終末期に(2世紀後半)、「前方後方墳勢力」、すなわち「ワニ族」によって駆逐された「奴国系倭人」、すなわち「安曇族集団」であったということである?!その「安曇族集団」が、「大和」(と朝鮮半島南部)で蘇ったということか?!穿った見方かもしれないが、それが、例の「物部氏」、すなわち、「日神(太陽)信仰」の「饒速日集団」であったのではないか?!そうとも、思われるのである?!

そうなれば、先の藤井氏の指摘、すなわち、「『前方後方墳勢力(ワニ族)』は、同じ吉備出身の『前方後円墳勢力(物部氏)』によって、言わば『下剋上の』に(同族の『尾張氏』の裏切り?によって?!)、近畿(大和)で主導権を奪われた!」ということが、まさに真実味を帯びてくることになる?!しかも、元来、「和邇氏(族)」は、「安曇氏」や「海部氏」らと同じく「海人族」とされているようであるので(直接は、「海部氏」と同族?したがって、「尾張氏」も?→それが、「天火明命」関係?!)、私の、これまでの一連の主張とも相俟って来る?!

繰り返しになるが、『古事記』は、ここで言う「和邇氏(族)」の一派である?「多氏」によって、「正史」である?『日本書紀』と併行しながら、秘かに?書き記されたもので(太安万侶→多人長による?)、時の藤原政権に睨まれない程度に?、自らの祖先・勢力の活躍(栄光?)を、言わば私的に?示したのではないかということであった(これだけは、言わせてもらうというスタンスで!)?!故に、「記紀」、とりわけ『日本書紀』においては、この「和邇氏(族)」のことは、あまり重要な扱いはされていないということであり、逆にそれが、実は、甚だ大きな存在・活躍であったことを、印画紙的に(多少古い?)示しているということでもある?!

最後に、今はまだ余談(まったくの感?)とはなるが?、例の「因幡の白(素)兔」に出てくる「ワニまたはサメ?」の話は、ここで見た「和邇氏(族)」の立場・役割を、それこそ「寓話的」に示したもののようにも思われる?!さらにまた、祭神が「木花咲耶姫」(伊予大三島の「大山祇神社」の祭神「大山積(祇)命」の子?)である「富士山本宮浅間^{せんげん}大社」等は、その「和邇氏(族)」の、東方への進出の事績?として、非常に興味があるものとなる!つまり、その「木花咲耶姫」と天孫「邇邇芸命」の子である「ヒコホホデミ(山幸彦)」が、いわゆる「竜宮城」(海?)で、「海神」の子である「豊玉姫」と結ばれ、神武の父親「ウガヤフキアエズ」が生まれたという「記紀神話(日向三代)」の話も、この「和邇氏(族)」を絡ませれば、また面白い史実が見えてくる?!

と言うのも、他ならぬ「豊玉姫」(その妹で、「ウガヤフキアエズ」の後の「玉依姫」も?)は、まさに「ワニ」であった?!「ワニ」は、「サメ」か?という議論もあるようであるが、彼らは、おそらく?中国「江南」から来た?海人族の流れであることは間違いない?!まだまだ、このような神話(寓話)は、単なる「お伽話」のようではあるが、かの関裕二氏が喝破しているように、多くの「お伽話」が、古代の真実を何らかの形で投影させたものであるのならば、一方で(ファンタジーを超えて?)、それが、具体的には、どういうことであったのか?そうしたアプローチも、まんざら悪くもないであろう?!多少の苦笑?を込めて、強く思う次第である?!